

教文通信写真館

ハチクマ 2024/09/23
松本市奈川 白樺峠



写真とエッセイ:伊藤宏昭さん(生物教育研究会 松本県ヶ丘高校)
ワシタカの渡り 日本に生息するワシタカ類(現在はタカ科)、サシバ、ハチクマ、
続きは6P

教文通信

発行所
長野県教育文化会議
発行人
寺尾 真純

今号の記事

- 01 家庭科教育研究会
総会・全県夏の学習会
- 02-06 支部教研
- 06-07 教育課程研究協議会
- 08 県教研

2024 県教研開催

全体会
分科会 実参集 11 分科会
on-line 17 分科会

長野県教育研究会が11月2日、3日に開催されました。2024年度も、上伊那農業高校、伊那中学校での参集とオンラインを併用して実施しました。

上伊那農業高校の全体会では、大会委員長の相場瑞樹さん(県教組委員長)から開会のあいさつがあり、続いて記念講演を行いました。講師の伊藤亜紗さん(東京科学大学教授、リベラルアーツ研究教育院、未来社会創成研究院)が、「ままならない体と生きる」と題して講演をしました。

常設の27分科会と特設分科会が開催されました。

参加者は、全体集会は約230名、分科会は約330名の参加があり、昨年と同じ参加者数でした。またレポート数は101本と過去4年間ほぼ同数です。県教研では「教育のつどい」(全国教研)へのレポート推薦がありました。

県教研当日は豪雨になりましたが、高教組上伊那支部には駐車場係をご担当いただきました。また会場の上伊那農業高校では農産物、季節の果物や花の販売を生徒にもしてもらい、大変好評でした。紙面をお借りして御礼申し上げます。

多忙化の中、教研への参加が難しくなっていますが、教職員が学び続けることが生徒への教育を創造的なものにしていきます。次年度の県教研、支部教研へご参加ください。



全体会は5年ぶりに実参集(オンライン併用)で開催

グラフ 2024 県教研



2024 県教研課題提起 (要約)

- ◆ ロシアやイスラエルによる武力行使が激化し、核戦力の行使も辞さないとする周辺国の動きが日本の軍事力増強論を後押ししている。今こそ、平和外交によって、世界をリードすべき。平和を希求し、民主的な教育のあり方や目的をともに考え、学び合いたい。
- ◆ 日本の公的な教育予算は少ない。子どもの9人に1人が貧困で、格差は拡大している。家庭の経済格差が、教育の格差に直結していくことが懸念される。所得制限のない普遍的な教育無償化の施策が求められる。
- ◆ 子どもの権利条約批准30年目の年。こども家庭庁が発足するなど、子どもの権利保障と最善の利益を図る基本方針が明記されたことは画期的。子どもとともにつくる学校や社会の実現に取り組むたい。
- ◆ 長野県第4次教育振興基本計画2年目。主観的指標による進捗状況数値化は、教育の平準化や教育内容の統制に繋がる。教育条件整備、社会改革や福祉事業改善等が必要。
- ◆ 学習指導要領で、主体的対話的で深い学びが打ち出され、道徳が教科化された。学びに向かう力、人間性等を、主体的に学習に取り組む態度で評価することは、子どもの権利に照らしても多くの問題を持つ。



◆過度のICT利用と生徒の成績の間には負の相関がある。モバイルデバイスの近くにいと生徒の注意力が散漫になり、学習に悪影響を及ぼす。授業方法の代替ではなく補完として使用すべき。

◆中教審答申で給特法体制は維持とされた。長時間労働の根本的な解決にならない。超過勤務は過労死危険ラインの80時間に迫り、精神疾患の高止まり、若年退職者が増加している。4月から欠員が生じる深刻な状況がある。

◆長野県小・中学校の不登校児童生徒数は全国3位の多さ。文科省は学校外での学習も成績に反映されるよう求めるが、現状の教職員数のままでの対応は困難。障害児学級や学校、通級で学ぶ児童生徒も増加し、施設・設備の老朽化と狭隘化は大きな課題。「インクルーシブ教育の権利保障」のために教育条件整備を行う必要がある。子どもの性犯罪も増加していて、包括的性教育実施の必要がある。

◆統廃合により、今後5年間で高校は15校以上減少する。再編基準は、見直しが行われることとなった。学校は地域の文化コミュニティの中心。小規模自治体や山間僻地校が多い長野県では、さまざまな立場の人と議論を尽くすことが大事。

◆長年にわたる教育研究会の研究成果、教育研究、教育実践に学び、次の観点から分科会での討論を深めよう。①子どもの今を捉えてその背景を探ろう、②子どもの学びについて語り合おう、③、憲法、児童憲章、子どもの権利条約の理念を生かした学校作りのあり方を討論しよう。(課題提起) 全文は、デジタル版35号に掲載)

記念講演

「ままならない体と生きる」(要旨)

伊藤亜紗さん (東京科学大学)



「良く生きる社会をどう作っていったらよいか」をテーマに考えたい。

「美学」は、感性を扱う。人間の認識能力には上位と下位があり、上位が「知性」、下位に「感性」があるとされている。美学は感性の立場から、人間の身体について考える。私たちは体について常に意識しているわけではないが、感じ方、考え方、人生観に密接に関わっている。身体を扱うとき、人文系の学問でも抽象的に唯一絶対の身体が存在するかのようには語るが、現実の体は一人ひとり違う。その違いに注目した体の研究をしている。社会で当たり前とされている分類体系をシャッフルすることにより、新しい知を見つづける視点で研究を進めている。

「病気になるということ」は、100年前にヴァージニア・ウルフがスペイン風邪にかかったときに書いた。病気になる、身体という視点から人間や社会を考えることで、その外側も意識する。人間は有限の存在だということ、ままならないということ意識しながら社会や人間のことを考えていく。それが身体論の視点。社会というのは直立人(健康な人)たちが中心に作っている。健康な体が前提になっていて、生産性が数値化される。計画とそれを実行するための制御があり、競争が行われている。やることには目的や意味があつて、それは希望に向かう。そういう社会を作ることとはとても重要。しかし、同時に、身体論の視点には、そこに不気味な影を落とす。病気になる、不確定要素や制御不可能性が入ってくる。ヴァージニア・ウルフは逆にこれこそが人間にとっては癒しだという。横臥人(病気の人)には外部があり、そこと繋がることで発見される知があり、そこからどうやって社会を作っていくのかを考える、それが身体論の役割なのではないかと思う。

障害者支援の現場では、日常的にコミュニケーションを大事にしているか

ら、会議で一つに決めることに対する警戒心がある。社会の側の価値観をどう変えるかということも重要だと考える。効率が良いとは言えず、マニュアル的なものとの相性が非常に悪い。会議の中で発せられた印象的な言葉がある。「会議は、自分の価値観を疑う練習」。他者の意見を聞くことで、自分の価値観が相対化されるということ。自分の考えを絶対化しないことができる。

最後に話したいのは、マニュアルと倫理ということ。教育の現場でも、マニュアル的なものはたくさんあり、それだけでは済まない感覚が皆さんの中にもあるのではないか。日本は良くも悪くも社会が高度にシステム化されていて、それによって解決策を見いだしている。「手作りのケア」の



マニュアル
(規範)

- ・普遍的
- ・システマティックな対応
- ・役割の範囲内
- ・先回りの配慮
- ・バイアスや私情の排除
- ・安定的、杓子定規
- ・不確実性を最小限にする
- ・未来への責任



倫理

- ・個別的
- ・属人的な対応
- ・人間としての行為
- ・相手に合わせた対応
- ・逡巡とためらい
- ・流動的、生成的
- ・不確実性を受け入れる
- ・その場のしづ

いい加減

いい加減=規範に対する操作性

+よい意味… ちょうどよい、適切

-悪い意味… 雑、あいまい

英語に翻訳するとしたら??

→複数の価値があるときに、みんなが納得するポイントをさぐる。穏当。



入る余地がどんどん小さくなっていく。その対極にあるような東南アジアの社会から日本がどういう社会なのかを相対化して見たときに、これだけ社会システムががちりちりしている国だからこそ、意識的に風穴をあけることが必要だと考える。そうしなければ、システムを実行するだけの人間になってしまう。マニュアルは効率的かもしれないが、ひとつの正解を全員に当てはめてしまいう感じがある。それにより、欲望や尊厳といったものが大切にされない感覚にもなる。それに対して倫理が必要だ。倫理とは、自分と相手の関係の中で最善の選択を考えながら、創意工夫の中で手作りのケアをしていく態度。当然、倫理には、リスクもあるわけで、両者の相互補完が重要なのではない。倫理を考えると、「いい加減」という言葉が大事だと考えている。「いい加減」というのは、規範とかマニュアルに対し、どのぐらいそれを揺さぶるかということ。対応する英語は「reasonable」。reason、理性的・合理的なという言葉が入っている。複数の考え方、複数の価値観が存在するときに、みんなが納得するポイント、みんなが少しづつ譲歩して、「納得できる」という本場に重要なポイントを探すという意味が、reasonableには含まれる。効率が悪いかもしれないが、人間を大事にする倫理的な態度であって、それを非常にシステマティックな日本社会の中にどうやって作っていくのか。それが、ままたらないう体を抱えながら生きていく私たちが考えなければいけない課題なのではないか。（「記念講演」要約は、デジタル版36号に掲載）

2024教育のつどいレポート紹介
教室での実験実習が難しい単元の内容を生徒にどうイメージさせるか

飯田OIDE長姫高校 木下 通彦

本レポートは「生物の多様性と生態系」の単元のうち「植生とその変化」「遷移のしくみ」のまとめとしておこなった授業実践の報告である。「生物基礎」の植生の単元はなかなか実験等ができない単元で、できれば野外に出て、実際にその場で考えられれば理想であるが、現実には話だけになり、今の生徒には実体験も少ないために実感させにくい単元である。また、写真をただ見せるだけでは、森林の成り立ちやしきみについて考えるには至ることはなく、イメージもつかめることはなかなかない。そこで、植生の成り立ちについて生徒が思考することができるよう、工夫して実践してみた。授業の展開は、遷移のしくみについて講義した後自然の森林で起きている森林の倒木更新について、写真を見ながら自分たちで考えられるよう工夫してみた。グループワークで他の人の意見を聞くことで、さらに自分の持つイメージを膨らませ、森林の成り立ちについての理解を深めることができるようにしてみた。写真はPowerPointで示す他にGoogleドライブに置き、生徒はそれを自分のタブレットで見ながら考えられるようにした。

1. 授業講座概要

本校は各学年工業科5クラス、商業科2クラスの総合技術高校で、県内では大きな学校のひとつである。卒業後の進路は進学、就職が約半々で、進学のはほとんどは推薦入試で大学、短大、専門学校に進学している。理科の履修は1学年では全学科共通で「科学と人間生活」を履修し、2学年では工業科が「物理基礎」、商業科が「生物基礎」を履修している。3学年では選択で工業科は「物理」「化学基礎」、商業科は「生物」が履修できるが、主に進学者向けに開講している。今回のレポートは2学年の「生物基礎」での実践である。

2. 講座・単元・目標

- 対象 生物基礎 商業科2年生必修 2クラス
- 単元 生物の多様性と生態系 植生とその変化・遷移のしくみ 授業の目標
- ・遷移の数十年、数百年という時間軸で植生の変化を捉える。
- ・森林の形成について、質問の答えを写真を見ながら考えることで、学習したことを基に想像して、具体的なイメージをつくる。

・他の人の意見を聞きながら、自分のイメージを膨らませることで、森林のしくみを理解する。

3. 授業展開

単元「植生とその変化」、「遷移のしくみ」を写真等を用いて PowerPoint を用いて講義の後、本時を展開

本時のながれ（1時限）

- ① 極相、ギャップなど「遷移のしくみ」の復習を特に極相林について確認。
- ② 自然林における樹木の分布の様子を写真で見える。特に島状の分布がわかる写真を用意した。
- ③ 実生や幼木がどのように生えているかをその様子がわかる写真で観察する。
- ④ 根上がりの写真を見せ、どうしてこうなってしまったのかを考える。
- ⑤ なぜ、自然の森林では樹木が島状に分布しているかを考える。
- ⑥ まとめ

4. 資料

授業では生徒に Classroom で写真を入れた Google ドライブのフォルダの URL を送り、その写真も参考にできるようにした。



5. 授業の感想

・木が丸くなっているのは倒木の上に芽生えて、倒木を避けて根を張ったが、倒木がくちて空間ができることを知れた。自然の森林では、樹木が島状の分布をするかと言うと、倒木に沿って芽生えると一部に集中することがわかった。日本は島状分布が多いことが知れた。

・倒木の上に生えた芽が成長し倒木が腐ってなくなったために根上となることがわかった。また、色々な条件が重なることによっても芽が生えてくる。倒木になったらおしまじやなくて新しい芽を生やす最後の仕事とわかった。

・面白い生え方をしているなぐらいにしか思っていなかった樹木だったけど、なぜそうなっているのかを考えながら見てみると色んな視点から考えてより面白かったし、倒れた木の上に生えるのは初めて知ってすごいなと思った。

・生まれてくる子どもの木（実生）が成長し成長して大きくなることで穴が空いたり木と木の距離が近くなったりすることを学べたので良かったです。樹木の分布には3つの種類があることも知れたのでよかったです。

・木は地面に生えるものだと思っていたので、有機酸のせいで木の上の方が育ちやすいことにとってもおどろいた。森の写真を見るとよく倒木に苔がよくついているのを見かけていたので、そこから木が生えたり木がまとまっている理由を知ることができて、今まで気にせず見てきたものが実はちゃんと理由があつて木がまとまっているのは倒木に水分などの栄養があつて小さい芽が大きくなってまとまってしまうことなどが知れて、ワクワクしてとても面白かった。

・木の根が浮いている様子は見かけたことがあつたけど、どうやって空洞になるのかという過程は考えたこともなかったからそれを考えるのが面白かった。

・実際に写真を見ながら考えたことで自分の意見を何個か出せたし木が実際に動いているように感じて面白かった。なんで下の土の方には全然生えていないのかなと不思議だったけど、笹に覆われていて成長できないことを知って納得した。

・樹木の分布は種が落ちたところにランダムに生えるものだと思っていたけれど、そうではなく、条件が揃わないと大きくなれないため島状分布になっていることがわかった。人工的に作られた森林はびっくりするくらい等間隔でまっすぐ空に向かって伸びていることがわかってオモシロイと思った。木の幹にまとまって生えることや、実生が丸太の形に沿って成長してその丸太が腐ってなくなつたらそのままの宙に浮いた状態で成長していくのもオモシロイと思った。

・あんまり森林の木の生え方とかを気をつけて見たことなかったけど、色々あつて面白かった。島状になっているのも根上りしているのも、たまにはなくて理由があることがわかった。

【資料】授業スライド

自然林について考える
樹木はどんな分布をしているでしょうか
なぜ、こんな分布をしているのでしょうか
アカマツ
2006.04.26
飯田市上郷
2018.07.14
八ヶ岳

ギャップ
ブナ ヒノキ
2019.07.16
木祖村水木沢

自然のままの森林の中では樹木はどんな分布をしているでしょうか
ネズコ (クロベ)
2018.06.30
売木村茶臼山
参考資料 人工林 人の手で植えられた林
カラマツ植林
2018.08.25
木祖村水木沢

問1
写真を見て、自然の森林では樹木の分布はどのタイプになるでしょう。
選びましょう。
(a) (b) (c)
ヒノキ・サワラなど
2018-8-25
木祖村水木沢

・なかなか難しく、自分の意見を出すことができなかつたけど他の人達の意見を聞いてみるとなるほどなど共感したり理解することができたので良かったのと思いました。倒木について様々な知らないこともしれたし、考えてもなんとなくしか浮かばなかつたことは友だちの意見を聞いて考えをふくらませることができたので良かったと

思いました。

6. まとめ

多くの班で、目指す結論に行きついており、最終的に樹木が鳥状になる原因として倒木があることを理解できたと思われる。また「いかにイメーヂを持たせるか」を課題としたが、感想に「実際

に動いてるように感じて面白かった」とあったことは大変うれしい成果であった。

写真はすべて私が撮ったものを使ったが、生徒にわかりやすい写真の選定には苦労した。できるだけ目指す結論に行きつきやすいよう選定したが、なかなか森林の様子がわかる写真を撮るのは難しく、できればなるべく同じ場所の写真にしたかったが、それはできなかった。

写真はそれとわかるものを選んだので、かなり強引に結論に結びつけてしまっている感じになってしまった。こればかりではないことをもう少ししていねいに説明する必要があると思う。今後に向けては、根上がりは主に長野県内のヒノキやシラビソなど針葉樹でよく見られる現象だが、ミズナラ、イヌブナなどでは株立ちなどで鳥状になる場合もあり、また、コメツガ林などでは鳥状にならず、均等な間隔で生育していると見られる場合もあり、自然林にはさまざまな形態があることをしっかりと理解させることも工夫したい。

参考文献

沼田真編 植物生態の観察と研究 東海大学出版会 (1978)・宮脇昭編 日本の植生学 研 (1977)・平野恭弘他 森の根の生態学 共立出版 (2020)・四手井綱英 森の生態学 講談社 (1976)

長野県教育文化会議第4回総合研究会

**ジェンダー平等の教育を考える
総合研究会**
on-line

2024年12月7日(土)
13:00~15:30 (予定)

講演&討論

講演

**ジェンダーの視点から考える
デジタルテクノロジー**

ソーシャルメディアの広がり
とジェンダー規範の形成
若者によるソーシャルメディアの利用
とジェンダー
ジェンダーの観点からみたAI技術
がもたらす影響
メディアや情報コミュニケーション
における差異や格差の再生産

討論

教員として持っておくべきメディアリテラシー
教育現場で気をつけていくべきこと
生徒たちに伝えていくべきこと



講師 **田中洋美さん**
明治大学情報コミュニケーション学部

主な著書・出版物
デジタル社会におけるダイバーシティ&クリエイティビティ
テクノロジー、パワー、社会:デジタルトランスフォーメーションに関するグローバルな視点



講師情報

長野県教育文化会議 第4回総合研究会
ジェンダー平等の教育を考える総合研究会

「教員研修プラットフォーム」「研修履歴記録システム」で
「任意」の研修として記録可!



参加申込はコチラ

教文通信写真館エッセイ (つづき)

日本に生息するワシタカ類 (現在はタカ科)、サシバ、ハチクマ、ノスリ、ツミなどが春と秋に日本列島と東南アジア諸国の間で大規模な渡りを行うことをご存じでしょうか。

愛知県の伊良湖岬、鹿児島県佐多岬ほか全国に著名な観測場所が点在していますが、長野県にも松本市郊外白樺峠が秋の渡りの観測場所として著名です。9月上旬から11月中旬ころにかけてそれぞれの種が出現ピークをずらしながら峠の上空を通過していきます。中でも9月下旬はサシバ、ハチクマの出現ピークで多いときは総数が一日当たり数千羽になることもあるそうです。

白樺峠における渡りの研究は、信州ワシタカ類渡り調査研究会の皆さんによる30余年にわたる努力のたまもので、この連載記事の前任者である木下通彦先生も主要なメンバーの一人です。私は1990年代後半当時の勤務校の生物部部員を引率してご指導をいただいたことがあります。

今年は久しぶりに数回訪問して勇壮なワシタカの渡りを観察、撮影しました。峠から松本平方面を見渡していると、突然数羽から数十羽のワシタカの群れが上昇気流に乗ってらせんを描きながら急激に上空に昇りつめ、そこから一気に風の流れて南や西方向に流れていきます。時に目の前を水平に流れる姿をとらえることもできます。

写真はハチクマ成長雄と思われます。ハチクマはその名前の通りジバチなどのハチを主食としており長野県他日本各地の山地帯で繁殖しているようですが、その生態はいまだ謎に包まれているとのこと。白樺峠で秋観測されるハチクマだけで数千羽にのぼるようですから、夏の人間目についてもよさそうですが、一般にはなじみの薄いタカです。しかし、目の前で観察すると翼長が優に1mを超える姿と、多様な羽根の模様が美しく、観察する人々の心をとらえて離しません。その保全を含め生態が解明されていくことを願っています。